

【教育実践論文(ソニー子ども科学教育プログラム) 審査講評】
2023年度 最優秀校
福島市立三河台小学校

まずは、実践の場を理科・生活科にとどまらず、家庭科、図画工作科まで広げ、さらには地域素材・人材を活用した学習を構想している点です。様々な教科や外部環境との連携を目指せば目指すほど、教育実践としての一貫性を保つのは難しくなりますが、研究構想を軸に一貫性を保ちながら多様な教育活動を展開されております。STEAM教育や総合知が求められる時代にふさわしく、その意欲的な姿勢を大いに評価いたします。

次に、児童一人ひとりの記述や発話を丁寧に読み取り、子どもたちの変容過程を描き出そうとしている点です。論文では、「科学が好きな子ども」の具体的な姿や授業実践で大切にしたことなどが色分けられてわかりやすく示されるとともに、授業前後、そして授業中の児童の様子や発言が丁寧に描かれています。また、「振り返りシート」において縦軸を「感動や発見のレベル（心の動き）」、横軸を「授業の経過（時間）」を座標にして変容を自覚する取り組みも、特徴的で興味深い研究事例と感じました。

来年度の計画も、具体的に定めた子どもの姿を実現するために、手立てに改善案が盛り込まれ、新しい項目が追加されています。教育が目指す姿が明確に言語化されており、共通認識のもとに教育実践が行われている好事例だと思います。

真に教科横断的・分野横断的で多角的な科学の教育実践の好例となるよう、指導内容の一層の深化を目指されることを心から期待いたします。